

アジアの問題とは何か
ークアラルンプールで考えるー

開倫塾
塾長 林 明夫

Q：クアラルンプールには何をしに行ったのですか。

A：(林明夫：以下省略)「東アジアに関する世界経済会議(World Economic Forum on East Asia)」に参加するためです。主催は、毎年1月にスイスのダボスで開かれる「ダボス会議」のWorld Economic Forumです。この「東アジアに関する経済会議」は、「東アジア版のダボス会議」と呼ばれています。毎年1回、東アジアの各国をまわり2日間にわたり開催されます。去年はシンガポール、今年は6月15、16日両日マレーシアの美しい首都クアラルンプールで開かれました。明年は、韓国ソウルで開かれるようです。

約200人が東アジアだけではなく、全世界から参加。日本からは、渡辺喜美大臣、川口順子元大臣、約10名の民主党の若手議員(自民党からは国会のため参加できず)、はじめ20数名が参加しました。私は、東京の経済同友会の幹事として参加させて頂きました。

共通語は英語ですが、日本語と中国語の同時通訳が大半の会議でつきました。

今年のテーマは、「新しい不確実性に答える(Responding to New Uncertainties)」でした。

会議のサマリーと詳細な内容は、World Economic Forumのホームページで全て公開されています。(但し、すべて英語です)

Q：林さんは、毎年この会議に参加しているようですね。なぜですか。

A：10年程前に、この会議が、アジアで開催されている国際会議で最も質の高い、内容のある会議であると、当時パレスホテルの常務をなさり、現在はドイツ証券の監査役をお務めの高橋さんから、弁護士の高井伸夫先生の勉強会で教えて頂いたからです。

私の長年の夢は、毎月1回は、日本や海外で開催される内容のある国際会議に参加して、日本や世界にとって最も大切な問題をともに考え、できるところから行動に移したいというものでした。夢が少しずつ叶い、2001年は、香港にあるアジア・ソサイアティ(Asia Society)の会員として、2002年からは、東京の経済同友会の会員として、この東アジアに関する国際会議に毎年参加させて頂いております。

私は一度通いはじめ、その価値が直観的にわかると、余程のことがない限り同じ勉強会や会合に通い通す方ですので、この会議も、以来、8年間参加させて頂いております。

最初の2～3年間は、あまりの難しさについていけませんでしたが、しかし、後日、会議の議事録が送付されて来ますので、会議の様子を思い出しながら、半年くらいかけて読んでいますと、少しずつ「理解」が深まってきます。最近では、次の年の会議の直前にもう一度去年の議事録に目を通し、最前列の最も講師に近いところに着席して議論に参加するようになって、ようやくアジアの抱える問題の所在や、ものごとの本質のようなものがわかりかけてきました。

Q：アジアの抱える最大の問題は何ですか。

A：教育による貧困からの脱却と考えます。終戦直後から東京オリンピックが開催される 1964 年くらいまでの日本とはほぼ同じ状況なのが、大半のアジアの国々と私には感じられます(シンガポールを除いて)。

農業国家から、工業国家への脱却。地方から都市への人口集中。これに、人口爆発の 3 つが重なって、国内や隣国との間で紛争を抱えている国を除いて、急激な経済成長が当時の日本と同じように、当時の日本をお手本にして、現実のものとなっています。

このアジアの急激な成長のテコとなったのが、初等教育による識字率の向上と中等教育の充実、大学をはじめとする高等教育機関の志の高さと私は考えます。

Q：この会議では、教育について議論はされたのですか。

A：アジアの抱えるすべての問題の最終的な解決は人材育成、つまり「教育」であると、朝 8 時半から夜 10 時すぎまで開催されたすべてのセッションで語られていました。

今、アジアは極端な人材不足です。アジアの爆発的な成長は、学校教育で育成されるスキルのレベルをはるかに越えている能力を求めています。スキルのある人材の不足は無限大。人材をめぐる戦争は始まったばかりとさえ語られていました。

Q：この月刊「私塾界」をお読みの学習塾、予備校、私立学校の経営者や経営幹部の皆様にお伝えしたいことがありますか。

A：昨年、青木フォーラムの青木清先生にお連れ頂き、日本の学習塾にあたる韓国の「学院」を見学させて頂きました。その折りに、「学院」では中学 1 年生に「トーフル(TOEFL)」の 300 ページの教材を用いて英語を指導していることを知りました。先日、駐日ヨルダン大使から「英語とコンピュータが使いこなせない人は大学を卒業させない」とお聞きしました。NHK 特集「インドの衝撃」では、雨漏りのするトタンの天井の下で、500 名の予備校生がインド工科大学を目指し、肩を寄せ合って微積分の応用問題の授業を受けている姿が報じられていました。何のためにインド工科大学に進学するのかと問われた受験生の、育った村に道路や学校をつくるためとの答えは、その志の高さに胸を打たれました。

我々民間教育にある者は、教育本来の意味、教育の果たす役割をもう少し目を見開いて知り、その意味を仲間や児童、生徒、学生、更には保護者、地域社会の人々にも伝える必要があると考えます。

Q：最後に一言どうぞ。

A：せんえつとは存知ますが、今月も、読めば必ずためになる本を御紹介させて頂きます。

岡本薫著「教師のための『クラス・マネジメント』入門」日本標準 2008 年 8 月 25 日刊。副題は「プロのイニシアティブによる改革に向けて」。学習塾、予備校を含めすべての教師の意欲や能力を活かす「クラス・マネジメント」が紹介されています。著者は「日本を滅ぼす教育論議」(講談社現代新書)を執筆され話題となった先生です。岡本薫先生のバックボーンは、同著「Ph.P 手法によるマネジメントプロセス分析」商事法務、2008 年 1 月 25 日刊、でより深く理解できます。

経営者が、経営者であり続けるためには、「勉強」と「執念」「ねばり強さ」以外ありません。歯を食いしばってがんばりましょう。

— 2008 年 8 月 24 日記 —